

都市デザイン研究室 永野真義氏が助教に着任

The Interview on New Assistant Professor, Masayoshi Nagano

text_TANAKA/M1

2016年8月1日付で、永野真義氏が都市デザイン研究室の助教に着任しました。永野先生の経歴と研究室の助教としての抱負を伺いました。

>これまでの経歴を簡単に聞かせてください。

2011年に都市デザイン研究室を修了しました。ちょうど、3.11があったときですね。修士設計の梗概を書いている時に地震が来て、9階がすごく揺れました。それがここでの最後の思い出です。その後、日本設計で意匠設計を約5年半やらせてもらいました。学部3年生のとき死にそうになりながら集合住宅演習をやって、僕はあれがすごく楽しかったんで、その延長でずっと設計を頑張ってきました。中島直人先生や野原さんに指導してもらって、北沢先生や西村先生もたまに見てくれました。そのまま卒業設計をやり、修士研究も設計でやらせてもらって。最初は修士論文前提でやってたんですが、中間ジュリーの時に設計やってもいいんじゃないのと言って頂いたんですね。そんな流れもあり、実際に設計図を描いて具体的な形を作る仕事の方が向いてるかなと思い、就活では設計力を評価してくれた日本設計に決めました。

>学生時代はどういうPJに携わりましたか？

一番関わったのは、足助PJです。豊田市から委託を受けて、まちの将来像を考えるPJでした。街道に面する町割りがすごく細長いので、表面だけでは足助の良さが伝わらないと考え、「うちめぐり」と題して町家の内部を味わってもらおうという企画をやりました。大きな敷地の空き家がたくさん出始めていてその活用提案もしましたね。今でもまちの人と連絡しています。大学に戻ってきたので、また訪れたいなと思っています。(詳しくは、都市デザイン研マガジン 236号「まちに残したものとほ」へ)

元々、足助はお金持ちのまちでした。一歩家の中に入ると、銘木のような太い梁がかかっていたり、巨大な庭石があったり、本当にモノが良い。ただ古い街並みもあるけど、古けりゃ良いってものではない。質が良いものだからこそ価値があります。堅穴式住居くらい古いと価値があるかもしれないけど、古いだけだと本当に残すべきかどうか。東京の風景でも、僕は良いものを残すべきだと思う。「萌え」と「良いものを見分ける力」は違うと思う。ネット上では団地萌えや高速萌え、廃墟萌えといった流行の都市観があるけれど、それに合わせるのではなく、それが本当に良いものかをもう一度考え直さないといけない。僕たちは都市を楽しむ専門家ではなくて、都市の中にある良いものを見極められる人です。慧眼、審美眼、そういうものがなければいけません。難しいけど、人がまだ気づいていないところで見つけてくる。

>PJ以外だとどのような活動をしていましたか？

PJ以外ではコンペをいくつか出しましたね。一番印象に残っているのは、渥美半島を通る電車の終着駅の設計コンペです。3m×5mの駐車場サイズをひとつのユニットとして、パークアンドライドのための駐車場整備と高齢者向けのサービス住宅を組み合わせる提案をしました。地域社会圏を提唱していた山本理顕さんが審査員長だったので、「パーキング社会圏」と打ち出したら途中で非常に受けが良かった。けど、質疑応答で理顕さんから質問があって、ちょっと僕の受け答えがよくなくて、佳作に終わってしまい…。コンペ、やりたいですね。設計もできる研究室だっ

▼学生時代の永野先生。足助にて



▼コンペの際に作った



て発信していきたいですね。

>会社では具体的にどんな仕事をやっていましたか？

主な仕事は日本橋の再開発でした。数ある日本橋の再開発の中でも特徴的だったのは、重要文化財である日本橋高島屋の保存活用を前提とした計画だったことです。高島屋が高さ31mだから、その上空の容積率を周りとやり取りして、高島屋本館は保存活用、隣の街区に超高層を建てるという仕事です。面白かったのは、ニューヨークのSOMという世界でも有数の設計事務所が外装デザインを担当したこと。SOMのプレゼンテーションはいつも美しく、とても刺激になりました。大きい再開発になるとたくさんデザイナーが入ってくるんですよ。外装、内装、ランドスケープ、サイン、照明、商業。日本設計は、そういう色んな人たちを束ねる立場のマスターアーキテクトでした。そこが醍醐味なんですよ。ひたすら大変ですし、嫌な部分もあります。自分達でデザイン出来る範囲がすごく限られるので。とは言え冷静に考えれば、まさにそれは都市デザイナー的な仕事だなという気もするじゃないですか。いろんな細かいデザインをする人たちの方向性を束ねていく。その意味で、若干嫌でもあり楽しくもあるスキームでした。

>研究室に戻った経緯をお聞かせください。

中島直人先生から突然「話があるので飯でも食べませんか？」とメールがきて、食事に行了きました。そして席に着くなり「さっそくだけど、研究室の助教として戻りませんか？」と。その瞬間はピンとは来なかったのですが数日考えて、助教というと中島直人先生、野原卓さん、阿部大輔さんなどお世話になった思い出もあり、恩返ししたいなと思ったことと、「デザイン・設計を教えられる人が必要」と言ってもらって、期待に応えられることもあるかなと思い、2週間後に受けますと言いました。言っただけなんですけど、僕には論文業績がなく、大学の審査に時間もかかって8月着任になりました。中島伸先生にはこの数ヶ月間多大な迷惑をかけてしまいました(笑)。

ちなみに、黒瀬さんが助教として東大に戻って来た時、僕はちょうど修士設計の時期でアドバイスをたくさんもらいました。実務経験があると、物事を決めて前に進める能力がすごく高まるんですね。例えば中島直人先生は、物事を調べて思考を巡らせ、そこから無限の想像力を働かせるプロフェッショナルで、ディスカッションをするとある意味延々と議論の相手になってくださる。一方で修士設計とかで止まっている時は、黒瀬さんに前に進める力を教わったような気がします。実際都市デザインもそうで、我々がPJでやる時も、思考実験、社会実験に加え、方法論を形にして定着させていくことが重要です。僕も社会に一度出た立場として、思考から行動に移して、さらに形にするところをやりたいです。

>プロジェクトをやることの意味について

実際に皆さんPJをやっている、どう感じていますか。PJの最終目標はありますか？何のためにやっているのかを考えたすと、なかなかプロジェクトが前に進まなかった。でも、今やっていることが社会的にどういう意味があるかちゃんと俯瞰して認識する力がやはり大学には求められて



います。先ほどマスターアーキテクトの話をしましたけど、実際に日本設計の中で働いていると目の前の仕事に精一杯で、いろんなデザイナーを束ねて持っていくという仕組み自体に意味があるとはなかなか思えない。俯瞰してみると、マスターアーキテクトとしてデザイナーを束ねて一つのデザインコンセプトに収斂させるということは、社会的に重要な役割なんだと気付くことができる。

>永野先生は研究室をどのようにしていきたいですか？

もちろん和気藹々な感じでやっていきたいけど、ディスカッション能力って都市工の強みだと思うので、厳しいディスカッションを積極的にできる環境にしていきたいです。特に同期から言われたことって後々も糧になるんですよ。今はPJでM2とM1が一緒にやっていて、縦割り気味になっているかもしれませんが、同じ学年でどんどんディスカッションをしていけば修論にもいいのかな。あとはまち歩きを体力をつけるべく、みんなで運動？僕は休日ビーチバレーをしてるので、みんなでやる？

>ご自身の研究についてどう考えていますか？

論文は書きます。興味の一つは空き家再生。うちの近くにちょうど空き家があって、使わせてもらえないかと交渉中です。足助でも何かできないかな。もうひとつ、大野秀敏先生がまとめたFiberCityのような都市論を、うちの研究室としても打ち出せるといいですね。個人的には木質都市に絡めてみたら面白いんじゃないかと。あとは容積率の問題ですね。容積率以外のインセンティブがないのか。これまでずっと考えられてきたけど、やっぱり根本的な話なので。

>最後に、研究室の学生へのメッセージをお願いします。

久しぶりに東大の学生と触れ合うとやっぱりみんなめっちゃ賢いなというのが第一印象。知識も話しぶりもしっかりしている。日頃からの蓄積があるなという感じがします。僕は助教ということで先生ではあるんですけど、学生と一緒に研究室を作っていくみたいです。デザイン教育をするという役割で呼んで頂いたんで、みんなの知識・経験をベースに、デザインの面でサポートしていきたいです。あと学生にはぜひ、行動することに対してビビらないでほしい。僕もそうなんですけど、実際行動に移すにはやはり二の足を踏んでしまう。個々のフットワークを軽くして、とりあえずやってみて、みんなで実績をつくっていききたいですね。

◆取材を終えて◆

先生の趣味から都市デザインに対する姿勢まで色々伺うことが出来て勉強になりました。永野先生、これからよろしくお願いします!! (聞き手:M2 王、M1 田中)

研究すること - 社会人を経験して -

The Fact of Research - Experience the Working People -

text_WANG/M2

冒頭インタビューの永野先生も社会人を経験していますが、その他にも様々なバックグラウンドを持つ方が都市デザイン研究室に所属しています。この度は社会人経験のある博士課程の学生お三方に、社会人を経験して大学に戻ることで見えてきたもの・ことについて、お話を伺いました。

矢吹 剣一 (Yabuki Kenichi)

2010 筑波大学 第三学群 社会工学類 都市計画主専攻 卒業
2012 東京大学大学院 都市デザイン研究室 修了
2012 ~ 15 株式会社 久米設計

keywords : 遊休不動産、規模適正化、総合計画

柏原 沙織 (Kashihara Saori)

2007 同志社大学 文学部 文化学科 心理学専攻 卒業
2009 東京大学大学院 空間計画研究室 修了
2009 ~ 11 株式会社 富士通総研
2012 ~ 15 横浜市立大学グローバル都市協力研究センター

keywords : ハノイ旧市街、歴史的環境保全

土井 祥子 (Doi Sachiko)

2002 東京大学 工学部 都市工学科 卒業
2004 東京大学大学院 都市デザイン研究室 修了
2004 ~ 15 日本ナショナルトラスト

keywords : 多様性と保全、風景史



> 博士課程に戻られたきっかけを教えてください。

柏原：2012 年から横浜市立大学の鈴木伸治先生の下で、海外の大学との連携・協働体制を作っています。その時にアジアの歴史的環境保全をやり始めて、台湾・ベトナム・タイなどの先生にお話を伺う機会がありました。自分は専門的な知識が全然無かったこともあって、最初は働きながら進学を考えていましたが妊娠のため断念しました。在職中に取りついていた研究費の期間が途中だったこともあり、研究環境を整えるため、また腰を据えて「自分の専門」と呼べるものを作りたくて進学しました。

矢吹：就活時は、業種としては組織設計事務所だけ考えていて、内定を頂いた久米設計へ行きました。実際働いてみると、開発といっても立地や敷地条件などで手法（制度）や機能が大体決まってしまう、同じ手法を反復し部分的な最適を図る枠組みになっているのが現状です。都市づくりを広い視点で考えた時に、それにやや疑問を感じるとともに、やはりそれを越えていくには、「学術」が重要ではないかと思いました。働きながらそれを考え続けていくことももちろん出来ますが、自分は大学で（自転車操業かもしれませんが）新しい知見を少しずつでも社会に提供していく方が合っているかなと思い博士課程の道を選びました。また、修士研究の続きをやりたいという気持ちも大きかった

と思います。

土井：私は文化遺産の保護に関わる仕事をしていましたが、建築や造園、歴史や民俗などの他分野の方と一緒にすることで、目の前の「モノ」の価値からスタートするのではなく、その前にある都市や地域の文脈から考える人がもっと必要だと感じるようになりました。また、コーディネート役が主な仕事でも、どうしても自分がもっと深く現場に関わりたいという思いが強くて、現実との間でジレンマも感じていた頃に北沢先生が他界されて、何者にもなれていない自分がこれからどうするべきか、最初にはっきりと意識しました。その後仕事の延長で研究会や学会の活動などに声をかけていただく機会が増えてきたことも後押しになったと思います。

> 社会人を経験したことは、どう影響していますか？

土井：私は地方での仕事がほとんどで、それぞれの現場で色々な大学の先生、研究室とご一緒にしてきました。デザイン研で当たり前と思っていたことは地方の大学では全く事情が違うことも少なくありませんでしたが、現場で専門家がいかに振る舞うべきなのかをよく考えさせられました。研究の意義は修士の頃はよく理解できていませんでしたが、仕事をしていく中で実践と理論の両輪を構築していくことの重要性を感じるようになっていきました。

味わい深いお話をたくさん聞かせて頂き、ありがとうございました。（聞き手:M2 王、M1 田中）

修士論文を終えて

Finished the Thesis for the Master Degree

text_TANAKA/M1

2016 年 7 月末日、都市デザイン研究室から 1 名が修士論文の審査を終えました。熱りが冷めないうちに、お話を伺いました。

> 今の率直な気持ちをお聞かせください。

気付いたら終わっていました（笑）。日々少しずつしか進まず不安でしたが、進めれば成果となることを実感しましたね。設計も挑戦したかったですが、まずは論文をしっかり書こうと思いました。

> 修士論文についてお聞かせください。

遊園地の跡地利用というテーマの中でも特に残存施設を活用している事例を見ました。全国の遊園地の跡地利用を網羅的に整理できたこと、事例から破綻した遊園地の再生手法や、廃墟的なものの価値を外部の人が発見するプロセスを明らかにしました。でも遊園地の本質として空間的に何を残せばいいかまでは明らかにできず、まだ結論は出ていないと思っています。結局それは自分で設計してみないと分からないので。

> 瀬川さんは「萌え」ではなく、「本当に良い」空間を設計したかったのでしょうか？

もちろん空間は設計者の嗜好に偏りがちです。「良い」とされるモノは人や時代によって違うけど、誰かがその人の良いと思うモノをつくるしかありません。学部生の頃から、多様な世の中において全員が良いと思える空間がない中で、まちの将来をどう考えられるかを、今も模索しています。



「国内の遊園地・テーマパーク跡地の施設残存型利用に関する研究」
閉園した遊園地・テーマパークの中でも、残存施設を活用した跡地利用に着目し、その転用手法とプロセスを明らかにした。まず、遊園地・テーマパークの跡地利用の現状を網羅的に整理し、跡地用途と残存施設の有無の 2 軸の観点から、跡地利用事例を 4 つに分類した。施設残存型跡地利用の内、積極的利用事例では、「呉ポートピアランド」と「到津遊園」を、消極的利用事例では「化女沼レジャーランド」を検証対象として抽出した。それぞれ事例の閉園前後のプロセスを追い、特に「空間の継承性」と、「主体と利用者の変化」を焦点として、比較検証を行った。積極的利用では機能面における利用者へ歩み寄る具体的手法、消極的利用では空間の醸成による新たな利用者への展開プロセスなどの知見が得られた。

> 研究を進める上でのアドバイスはありますか？

私の場合は最初に無謀な目標を立てて、だんだん絞っていきました。そういう手法もありです。それはしょうがないというか、自分が思っているより出来ることはそんなに多くない。先生方は、色々なアドバイスをくれますが、強要はしないので、最後に選択するのは自分だと思います。

> 修士研究ってなんですか？

私にとっては「集大成」ではなく、一時的に漏斗を設置されて、自分が解決したいと思った問題のひとつを自分なりに解いてみたという感覚です。世の中には色々な問題がありますが、絞らないと研究はできないので。卒業後はまた自由に色々な問題に向き合っていきたいと思っています。

> 最後に、研究室へのメッセージをお願いします。

先生方は、研究テーマ設定当初、廃墟という出発点に疑問を呈してはいたものの、最後まで見捨てないでいてくれました。常に、「私が何を問題と思っているか」を掘り下げて頂いたことに感謝しています。学生のみなさんは、忙しいとは思いますが、どうかして自分の研究と向き合う時間を取って、自分の好きなことを研究してください。最後に、ガラガラと研究室にいた私を受け入れていただき、ありがとうございました。

笑いが多く楽しい雰囲気での取材となりました。瀬川さん、ありがとうございました。（聞き手:M2 王、黒本、M1 田中、浜田）

✧ 編集後記

田中雄大

4 月以来、全ての取材に参加させていただき、色々な方のお話を聞いてきました。直接会って話を聞くということが、やはり印象を深く残します。経験してきた分だけ言葉に厚みが出てくることを感じながらも、その人の声や話し方、雰囲気など、大事な要素が紙面では抜け落ちてしまうことも実感します。限られた紙面の中で、いかに伝えるか。まだまだ不勉強ではありますが、研究室マガジンを通して学んでいきたいと思っています。

8 月のウェブ記事

その他 暑気払い！真夏の出会いと別れ

ぜひご覧ください！ <http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/>

9 月の予定

9/1-7 カトマンズ PJ 現地調査
9/17 神田 PJ こどもまち探検
9/26 冬学期スタート

Information